



# つのぶえだより

510号 2024・3・1

角笛幼稚園

年主題

ともにつむぎだす

～希望の中で～

3月の聖句

光の子として歩みなさい。

エフェソの信徒への手紙 5章 8節

角笛幼稚園の第3保育期が終わりに近づきました。一日一日と、園児である7名のお子さんたちの卒園の時が近づいてきます。

それと共に、角笛幼稚園が閉園する時も近くなりました。長らく発行されてきた『つのぶえだより』も今号が最後の号となります。右上に号数を表す「510」という数字が記されていますが、次月を迎えて「511」となることはないのだなと思います。心の奥底に、悲しみの思いがないことはありません。そういうた具体的なものの中に、ものごとの終わりは現れることを思います。

しかし、閉園へと向かう日々の中で、繰り返し思ってきたことを、また心のうちに思います。それは、角笛幼稚園にとって最後の一年となるこの年度の『つのぶえだより』の巻頭言に、やはり繰り返し、いろいろな形で書き記してきたことと同じこととも言えます。『つのぶえだより』の今号の1頁目の右上に記された「510」という数字は、終わりの号を示す数字であると共に、この角笛幼稚園でなされたこと、園児としてこの園に通ったお子さんたちの様子などが記された『つのぶえだより』が発行されてきた年月と深く関わる数字であることです。この『つのぶえだより』が、1号、2号、3号、…、そして510号と発行されてきた年月は、幼な子が通う園として角笛幼稚園が歩んできた日々、その年月を表す一つの数字です。

角笛幼稚園の園長であった17年、『つのぶえだより』の巻頭言にどんなことを記してきたか。バックナンバーを見れば分かることではありますが、それを見ずに思い起こすことができるのは、恥ずかしながら、ごく一部、ほんのわずかです。ただ、ちょうどそれと同じように、角笛幼稚園に通われた多くの卒園生の方たちが、幼稚園における思い出として今思い起こすことができることも、きっとわずかなことかもしれません。しかし、そのわずかなものが、終わりを迎える角笛幼稚園の歩みの中でなされたことが、私たちの思いを超えて、何らかの形で残り続けることを示してくれている。そう思うのです。

以前に「角笛幼稚園」という言葉を入れてインターネットで検索した際、角笛幼稚園を卒園し、今は大学生や大人になっている卒園生の方々が、思い出などを書き込んでいる掲示板を見つけて、その書き込みを読んだことがあります。幼稚園に通った頃の先生たちの名前、クリスマス・ペイジェントのこと、大型の積み木があったことなど、一つひとつは断片的なことかもしれません、それぞれ良き思い出として書き込まれているのが分かり、読んでいてうれしくなりました。ある方が「幼稚園の園歌ってどんな歌だったかな?」と書き込んだのに答えて、別の方が「『つのぶえ吹こう、みんなを呼ぼう…』っていう歌だった」と記しているのを見て、幼い頃に歌った園歌を覚えていることにも感心しました。

私が角笛幼稚園の園長となった17年前、それは高井戸教会の牧師となった年でもあります。その最初の年であったでしょうか、高井戸教会の教会報である『高井戸教会だより』に掲載された一つの文章を読んで、印象深く心に留めたことを思い返します。角笛幼稚園の卒園生でもある教員の方が、ご自身の高井戸教会との関わり、その歩みを記した文章です。その文章の中に、ご自分が角笛幼稚園に通い、園長先生が卒園式で「光の子として歩みなさい」という聖書の話をされたのを覚えている、と記していました。その部分が私の心に残って、約17年が経った今、この巻頭言を書く中でも思い起こされてくるのです。

終わっても終わらないもの、私たちの中で残り続けるものがある。そして、そこに神さまご自身が関わっていてくださるならば、残り続けるものの中に、真実なものとして続していくもの、私たちの知らないところで思わぬ実を結んでいくものがきっとある。そう信じます。

角笛幼稚園にお子さんをお送りくださった保護者のみなさま、またさまざまなかたちで角笛幼稚園を支え、その歩みに関わってくださったみなさまに、深く感謝申し上げます。そして、角笛幼稚園の歩みを絶えずお導きくださった神さまに、心からの感謝を捧げます。ありがとうございました。

園長 七條真明